

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 21 日現在

機関番号：35412

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381325

研究課題名(和文) 特別な配慮を必要とする乳幼児の保育カリキュラムと保育の質に関する保育学的実践研究

研究課題名(英文) Assessments of early childhood curriculum for children who need special care

研究代表者

山崎 晃 (YAMAZAKI, AKIRA)

広島文化学園大学・学芸学部・教授

研究者番号：40106761

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、障害児保育に係わる課題について、質問紙調査と保育者の自由記述・インタビューにより以下の4点を検討した。保育者が障害児保育において認識している課題・問題について、障害児のいるクラスの保育に関する保育者の不安や悩みと保育の質について、障害のある子どもの保育における支援について、管理職と担任を対象とした結果、認識や行動が異なっていることが明らかとなった。さらに、4) 障害のある子どもの保育における保育実践について、障害児を担当している保育者の保育実践思考の特徴について明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study, focused on the way concerning care and education for disabled children, discussed the following four points, using questionnaires, free description and interviews by/with teachers, who are in charge of supporting disabled children; 1) The problems and tasks recognized by these teachers supporting disabled children. 2) The fears and agonies by the teachers in charge of classes which include disabled children, and the quality of support. 3) The support taken in care and education for disabled children. 4) The care and education practice. The results showed that there exist the difference between operating school managers and class teachers in their recognition and attitudes in the points 1),2) and 3). About the point 4), the characteristics were clarified in the thoughts on the care and education practice by the teachers in charge of disabled children.

研究分野：臨床発達心理学

キーワード：乳幼児保育 カリキュラム 特別な配慮 保育者 障害児の保育・教育 保育の質

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成28年 5月 10日現在

1. 研究開始当初の背景

近年、障害のある子どももいない子ども等しく教育を受けることができる機会を提供するためにインクルーシブ教育・保育が重要であると認識されるようになってきている。しかし、現実には就学前の教育・保育を実施するための基礎となる障害児に配慮した個別指導計画を作成し、それに基づいた保育を行っている就学前施設は多くない（山崎、2012）。また、これまでも保育の質に関する研究は行われているが、障害児保育の質について体系的な研究や障害児保育に関わっている保育者の悩みや不安などに関する研究は行われていない。以下、研究の必要性・意義を述べる。

1) 障害児を対象とする保育課程・保育計画に関する研究

先行研究の多くは保育課程・指導計画の編成状況の調査、支援システム・支援体制、あるいは保育論・保育の暗黙知など保育の根幹、保育内容の基礎となることに関する研究であり、障害児保育カリキュラムに焦点化した研究は少ない。さらに、保育課程の編成と保育の内容については実態の調査で終わっているものが多く、保育カリキュラムの内容を評価するまでに至っていない（清水ほか、2011）。また、保育課程や指導計画編成や日常の保育における障害児保育の位置づけ、障害児保育に関して保育者は何に悩み、何が難しいと感じているかを明らかにした研究は見あたらない。

2) 体系的な保育の質に関する研究の必要性

保育の質に関する先行研究は行われているが、障害児保育に焦点を当てた保育の質と保育カリキュラムとの関係やそれについ

て、全国規模の研究調査は行われていない。障害のある乳幼児の保育と障害のない乳幼児の保育とは全く同じものではなく異なる側面もあると思われる。また、障害の種類によって認知処理や行動特徴も異なるので、障害児保育を行うにあたっては、障害を考慮した保育カリキュラムの編成が必要であり、実際に障害児保育実践においては、保育カリキュラムと保育の質との関連づけが必要であるが、先行研究ではそのような関連づけをした研究は見あたらない。さらに、実際の保育現場において、年間・期・月・週・日毎に障害児のための個別指導計画を編成している園は20%以下である（山崎、2012）。このような個別指導計画作成率の低さの原因として、保育の質の評価が可視化されにくく、障害児に関する情報や理解が不足していること、また、対象が乳幼児であるために保護者との関係についても考慮する必要があることなどの影響が考えられるが確認されてはいない。

ところで保育の質の研究にあっては、「方向性の質、構造の質、過程の質、操作性の質、成果としての質」の5点に分節化して捉えることが重要であるという指摘があるが（秋田・早川、2011）、従来の研究においてはそのような視点をもった研究が少なく、保育カリキュラム研究において体系的な次元に基づいた研究が必要である。さらに、「保育環境評価スケール」や ECERS-R のような標準化された尺度を用いて保育の質を捉えることによって外国との比較が可能となり、我が国の障害児のための保育カリキュラムと保育の質との関連及びその特徴を明らかにすることができる。

2. 研究の目的

本研究においては、幼稚園や保育所における障害児に配慮した保育カリキュラムと指導に関する現状について明らかにした。

3. 研究の方法

(1) 障害のある幼児の保育・教育について保育関係者がどのような意見や考えを持っているかを、アンケート調査の自由記述により把握し、記述されたテキストをテキスト・マイニングによって分析した。(2) 障害児のいるクラスの保育に関する保育者の不安や悩みをアンケート調査によって把握し、また、保育の質を明らかにするために質問紙調査を実施した。(3) 障害のある子どもの保育における支援にどのようなとらえ方の特徴がみられるかを幼稚園・保育所、公立・私立を要因として、分析した。(4) 障害のある子どもの保育実践に関するインタビュー調査を実施した。

4. 研究成果

1) 保育者が障害児保育において認識している課題・問題について

障害のある幼児の保育・教育について保育関係者がどのような意見や考えを持っているか、保育者の自由記述データを分析した結果、気になる子が療育・診断を受けているか否か、小学校と幼稚園との連携・指導をどうするか、担任・職員に対する支援・研修、発達を支援するにあたっての職員配置・環境をどうするか、障害児・子ども、保護者、保育者・保育所の3者にとって何が必要か、定型発達児とともに成長することを含め、子ども達の援助にとって何が大切か、いかに専門的知識を得るか、クラスの中での対応や関わりの難しさにどう対処するか、の7点であっ

た。さらに、共起ネットワークにより職種毎の特徴を探ったところ、園長や教頭などの管理職では、特に小学校への就学や療育・診断をめぐる保護者との関わりに課題を感じるという意見が多かった。これに対して、担任では、障害のある幼児(「気になる子」を含む)と定型発達児の双方への対応に難しさを感じるという意見が多かった。また、全体としては、気になる子に対する診断を求める意見、さらに、主に発達障害に関する専門的な知識の提供や、専門的支援を求める意見が多かった。

2) 障害児のいるクラスの保育に関する保育者の不安や悩みと保育の質について

保育関係者を対象とした質問紙調査において「障害のある子どものいるクラスの保育を行う際に、不安や悩みなど感じておられることお書きください」と自由記述を分析した。

その結果、主任以上の管理職者は、「保護者と保育者の連携または、療育、通級との連携のとり方」などの記述のように、専門機関との連携の必要性を述べている回答者が多かった。担任の先生である非管理職は、表1の「声かけ」や「関わり方」のように、保護者対応に関する悩みだけではなく、子ども集団内のトラブルに関わる内容や障害児に対する適切な声かけの方法について悩む者が多かった。自由記述文の具体的内容として、「多動の幼児の行動が原因で、周りの幼児の遊びが壊されてしまい、集中して遊びを続けられない状態になることや他の幼児の遊びが発展しなくなることがある。」などが挙げられた。障害児の保育に関わる保育者が今後、必要としていることとして、障害児とのコミュニケーションに関する支援方法や、障害児と定型発達児との集団での保育・教育場面での支援方法の違い、障

害児の行動をどのように受け入れ、周りの幼児がどのように関わるようにすれば良いかなど、保育の質との関連も示唆された。

3) 障害のある子どもの保育における支援について

障害児の特別な支援について、検討した。その結果、幼稚園、保育所とも、クラス担任の自信度は管理職より自信度が低く、また、障害児が友達とかかわることで充実感や満足感を味わえるような保育をすることについては、公立・私立と管理職・担任によってとらえ方に違いがみられ、障害児のために最も重要だと思ふ支援に関する自信度については、公立・私立と幼稚園・保育所の違いによってもとらえ方に違いが見られた。

4) 障害のある子どもの保育における保育実践について

保育における障害児のカリキュラムを考えるうえで、保育者がインクルーシブな視点を持ち合わせることは非常に大切になる。そこで、保育者がこれまでの障害児保育の経験から、どのような保育実践を志向しているのか検討した。20XX年に6都県の9つの幼稚園、6つの保育園の計15園を対象とし、障害児を受け持った経験のある22名の保育者にインタビューを実施した。分析は、ポスト構造主義の視点から、「参加」を鍵概念として、「参加/不参加」の二項対立に着目して分析した。データを整理した結果、分析の対象となったのは、「行事への参加/不参加」、「集団活動への参加/不参加」、「環境構成による参加/不参加」、「加配教員の存在による参加/不参加」の4項目であった。行事への参加について、保育者は障害児にとって、参加を強いられることの辛さを理解しつつも、保護者の要望によって参加させざるを得ない側面もあるこ

とが示唆された。集団活動への参加について、ただ場を共にする参加にこだわらず参加の概念を広く持つことによって、クラス全体の雰囲気を作ることができると考えられた。環境構成による参加については、視覚支援の方法論にとらわれないことの大切さが明らかになった。加配教員の存在による参加については、加配教員が加わることによる担任の意識の変化が学び合うクラスづくりを妨げていることが示唆された。

結論として、「安心できるように見守る」、「クラスの雰囲気を大切に」、「ずっと同じパターンでうまくいくことはない」、「こちらが関心を向けているから、周りの子ども達も関心を向ける」というような保育における不易性が障害児及びクラスの子どもたちの学びに通じていると、保育者が考えていることが確認された。すなわち、障害児を含めたクラスのカリキュラムには、保育の基本である子どもを理解することから始めることが不可欠であることが示唆された。上述の点については、「子どもが安心できるように見守るためには何ができるのか。またそこから子どもは何を学ぶのか。クラスの雰囲気を大切にするためには何が必要で、そこから子どもが学ぶことは何か。子どもへの支援が同じパターンになってしまうのはどのようなときで、そのとき子どもの学びはどうなるのか。保育者はどのような行為を通して子どもたちに関心を向けて、子どもたちはどのような学びをするのか。」のような問いについて記録と議論を繰り返すことによって、脱構築実践を生み出すサイクルができあがり、障害児のための保育カリキュラムが構築されると考考察した。子どもが安心するためにはどのような特別な支援方法が必要かという、特別支援で一般的に用いられる問いからは生まれ

ないことであった。障害から立ち上がるカリキュラムではなく、その子の生活上の課題を克服しそれから立ち上がるカリキュラムでなければ有用でないことがわかった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

(1) 越中康治、廣瀬真喜子、松井剛太、朴信永、若林紀乃、八島美菜子、山崎晃、障害のある幼児の保育に関する保育者の意見 - テキストマイニングを用いた職種による特徴の検討 - 、宮城教育大学情報処理センター研究紀要、査読無、2014、22、33-38<http://www.ipc.miyakyo-u.ac.jp/nepo/no.21pdf/07.pdf>

(2) 越中康治、濱田祥子、朴信永、八島美菜子、岡花祈一郎、中西さやか、廣瀬真喜子、若林紀乃、松井剛太、山崎晃、就学前施設と小学校における障害のある子どもの保育・教育体制の整備と連携に関する実態調査、幼年教育研究年報、査読有、2015、37<http://home.hiroshima-u.ac.jp/ech/active/book.html> (印刷中)

〔学会発表〕(計2件)

(1) 障がい児の充実したあそびに対する保育者の認識 日本発達心理学会第25回大会、2014

(2) 障害児のいるクラスの保育について 保育関係者が感じる不安や悩み 日本保育学会第67回大会、2014

〔図書〕(計0件)

6. 研究組織

(1)研究代表者

山崎 晃 (YAMAZAKI AKIRA)

広島文化学園大学、学芸学部、教授、
研究者番号：40106761

(2)研究分担者

松井剛太 (MATSUI GOTA)

香川大学、教育学部、准教授、
研究者番号：50432703

越中康治 (ETCHU KOJI)

宮城教育大学、教育学部、准教授、
研究者番号：70452604

朴 信永 (PARK SHINGYOU)

椋山女学園大学、教育学部、講師、
研究者番号：50462057